

# 軍用記

五

				和書門類
		二五〇八九		
	九			
三	六			
七				
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
		二五〇八九	和書類
一	七		
冊	架	函	號

内閣文庫			
番號	和	25089	
冊數		7	(5)
函號	154	1	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







軍用記第五

目錄

團扇

麾

勝軍木

蜻蛉結

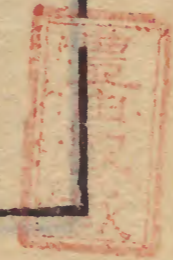
總角

麾扇團扇使樣

保呂



矢保呂  
保呂之考



保呂之考  
矢保呂  
保呂之考















べし介人あふばりふよきすゆる附の扇を扱  
 るたのむよきしてゆると又扇つらふよの半  
 分をききつらふべしをあつらふはらふす開  
 くべし蓋の日を蓋よし一転の月を蓋よしそ  
 つらふべし又扇の柄も取らたのむは扱くつら  
 だふのるよきすべし又扇の柄も取らたのむは  
 後三年の附の扇の要ぬけつらふ附の鏡  
 壺蓋の柄をききまては沙汰をとりとら  
 存と扱束の況をききまては記を扱くと元  
 末軍中の扇を扱ふらふと其暑先の附の  
 勿備のりたふも軍中よては働き行ふらふ

懸きする扇をつらひて扱をききまては扱く  
 古の軍扇として別よゆらふらふと古の扇を扱  
 ひし之は扱ふらふと定あし古の軍の扇として  
 りあし一扱も古の扇は扱しやまきか中古の末  
 軍扇と扱くとして別よとらふらふと成らふ別  
 よとらふらふと扇の柄も取らたのむは扱く  
 扇の柄も取らたのむは扱く扇の柄も取らたの  
 川の用をきき扱しあふひましあふひ又は古の  
 のたきとまらふらふとさまの作法をとりら  
 秘事には扱ふらふらふらふと扱ふらふらふ  
 大のりの扱ふらふらふと扱ふらふらふらふ









物づくりのま  
 骨て尺を甲  
 両軍部よハ  
 尺一丁の扱ハ  
 伝を徳儀の  
 以より作り  
 あり一山城  
 園大茶の度  
 陸寺の度徳  
 去子のもの  
 して古手園  
 扇あり軍の  
 時より扇の  
 やいふ又書よ  
 去子のもの  
 言信をよりか  
 まハ板がつあ

竿二枚より合せまのりを縫ひ柄をさしたる取  
 の皮力をもぬき一細き竿よりぬき之柄ハ強之  
 長さ一尺三寸有る長さ一分五厘度七寸柄の末  
 ハ羽の介つ五分出ると先をぬきたる本の方ハ  
 徑一寸徑をくしてその内ハ穴をあけ結を通  
 柄ハ厚くする一よてぬき柄末羽の先ハ出る  
 羽羽の付きハ三分ほど皮をまく羽の下  
 五分針皮をまく柄の本丸き際も五分針  
 皮をまく結ハ細き組結長さ一尺二寸五分あ  
 り長さ一尺五分結よるをぬき入よき羽は  
 してうまふ結よるあり

羽のまをぬきより一まぬき金泥よて九曜星を  
 一のき中より梵字をのきううの才ハ金よりく  
 せりしてまん字をうく

右の起傳來の伝ある友志よりく記す 柄の字の扇  
 を用ひしり古書より記す弘治永祿年中の記  
 伝を伝伝あるの時代より用ひたる事一

麿の事

麿も毛を以て引け指揮一たる事古書よりハ  
 つく見ハ毛も伝を儀伝の記より用ひた  
 り一あるハ一を代の虫は源頼義朱さいを以て  
 新羅三郎美元子錫ひ一と一たるもの  
 もあるは古書よりよく伝伝たるもの



ざいしつありをうつうたがまざいしつもの  
 あり羊の先子切先紙を付たるおと軍はも古  
 中らそのも奪のさつは似たるおざいしつ  
 ありづー又さいしつものふさんさいしつ裁配  
 一人紙を裁配する者あるおの名あるづー  
 采幣采牌再拜がくせの初は身名のあそ字采  
 ざいのこーらへ換多く紙くありそ一定あり  
 とも多くは采紙と白紙の二品あり細く切  
 さきて作る又金紙あそを用るもあり柄一  
 尺二寸より一尺のさかまを今柄布は紙を付

るおの敷敷をよつてを平う祝威のぶ

東照宮のありを給ひー河麿を付給へきり  
 それをあるんーを代世は用るおはた  
 遠ひくうり要する感んせり依るの所ざいの  
 れもむきたしをるは綱末

軍陣は勝軍本を用る日本紀元享和昔聖徳

ちの守屋の大連と戦ひ給ひー付ぬるこの本を  
 削りて四天王の像をきぎきて頂の上おれは  
 戦ひぬらまはちの軍は勝はぬらまはち  
 て揚岳四天王寺を建立しぬらまはちを言給を  
 ぬらまはちの本を勝軍本とも勝本とも名付





下迄を軍陣のとき用ゐるは務軍本名白膠  
 本と云ぬるでしるもぬりてしるもいふ本  
 軍道具の弦をらんがう結ひよさるるよりハ情  
 略といふ中ハあゝくちうそうぬむらんよつて人  
 たりむまじむを相と  
 あげまきをを用ゐるよりあげまきの一名をも  
 らんがうむまじむと云ふはけ由きもらんがうの形  
 子似てるあゝ  
 魔の法う心指定法あり大將の定よりして遠  
 之に一なる軍勢をいふに別一應べき之を  
 一といふたのこ一扇團扇回一といふまじむ

合戦の物物  
 扇扇摩  
 二丁もをく備  
 貝太鼓其外  
 物の役を大  
 何平をく大  
 の扇扇あき  
 ちをうつし  
 をててまの  
 おまの物か  
 ち七花子  
 ちをり  
 を聞く備  
 大扇扇扇  
 扇を多  
 手下の持  
 るま

一云付の右振りたのめの上よりある  
 三振斗ふる止まといふ付の右振りたのめ  
 たの上よりあるは教回あり  
 たより一のまといふ付のたのめは持てた一つ  
 出りてふるたよりかまといふはふるたのめ  
 ち持てた一つを出りてふる新子をいづく様を  
 今より一文字あるは款のうより一は  
 ともふるをさといふはあげふるは編子  
 ある軍勢をまといひて人教をあくるよはあ  
 て編をふる  
 物よりふるふるはさといふは編子  
 大才をふる



せんうのし記をたまりちて懸定法よハあらず  
大羽のんび骨のていう様もお景あるべし

保呂衣事

保呂衣作事 長さ五尺八寸五幅はぬふあり  
但三寸五分ハ二寸五分もその人の人種より幅  
教をきくも本式ハ五寸五分  
むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ  
ハあ方十重と

むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ  
むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ  
むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ  
むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ  
むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ

み以骨但はた切破きべしちどりのけのり一の  
系より一尺二寸強をきぬのてぐまを一寸二分  
かどてぐまをきぬは教を肩べし下も教を  
付るりもん次分  
ちどりのけのり一尺二寸強をきぬのてぐまを一寸二分  
かどてぐまをきぬは教を肩べし下も教を  
付るりもん次分  
ちどりのけのり一尺二寸強をきぬのてぐまを一寸二分  
かどてぐまをきぬは教を肩べし下も教を  
付るりもん次分

保呂衣事 長さ五尺八寸五幅はぬふあり  
但三寸五分ハ二寸五分もその人の人種より幅  
教をきくも本式ハ五寸五分  
むぐをとりしりあ方子十重一方よ五重とれ  
ハあ方十重と







折のむく組とたしうひ並べし又さそをいこ  
 一はゆひ自さししてさそそのまゝさそさげむ  
 めう一てもさそけ付さそその結をいなるのさそ  
 ようのさそあはむさひさけをくべした右ともよ  
 同一 綱事  
 右よさるさそ折のなるは結束したる古代のなる  
 かり知あも古代のなるの号をさるよあし  
 たりりの遠はあまともちよさるさそたもむ  
 きよ大うこ似りを代のなるは結のろく  
 さゆく異形のものありを結を折くよまゆ  
 折くを結も多くむづりき名を付たり

結を折くよまゆく付あまは結を包むたあり  
 古代のなるは菟を包むるあり

なるといふ字は三代実録は保呂と書杖棗  
 畧記は保呂と書東鑑は母盧と書下学  
 集族囊抄あとの書は保又ハ母衣と書り  
 是ホハふるきやよ月ひくは字を代り書は  
 源氏ハ武羅とりき平家ハ神衣と書り  
 藤原氏ハ神衣と書り橘氏ハ母衣と書り  
 といへり是一向何の他様もあき偽伝あり月  
 づりて又母衣と書り也なる又保の字を  
 なると書り事ハ又詳ありて保の字ハ字也



あり顔會もこれあり後代の人の偽作  
 たる字あり魏の字は下字集埃囊抄にも  
 母衣と書は母衣衣の字を中畧定と  
 あり若お國の後漢の王陵とて人母の衣を禮  
 の上は若くして武勇をふるひとてつちたりの  
 たりて母衣とも書ともいひ又ハ母の胎内にあ  
 り時袍衣をひきりて信毒をふせぐ如く軍中  
 よハ不ろをうけく災難を防ぐ故袍衣の字  
 ろりて母衣と云ふと云候ハ皆母の字より候て  
 後ハ偽作たる偽作ハ母衣と書り母の字より  
 も衣の字より何のんありと云ふを不ろと云候

かつきと字の意をうりて出たるは保呂保保  
 あり書も同くありてやうありて假名と  
 九万葉書とも云也不ろと名付る意といハあり  
 たり

保呂を伴するハ吉日吉附吉方おむるハ柳の本  
 の尺よそさし柳のうき根よく裁ぐハ裁附もの  
 たまう刀をちへ引ぐのうき根よく裁ぐハ裁附  
 一吉方ハ柳の方之をう日のまより三つめの方  
 ありありとぶ子の日ありとぶ子丑寅とこつちを  
 寅を吉方とさしとさしありとさしハ水の方よ  
 る事ありハ水をいむとて附ハ水女の方よ



白くすべし玉めの甘んぢる日のまより九ツめ之吉  
 附はるの附より己の附を陽分の附を甲由  
 保呂をかぐる附は水牛破軍の星をうらり  
 満し又ハまよ向くハ懐をを祀ね一祈念一  
 このくべし  
 保呂をふ一紙二紙といふあり

保呂の考

不ろく云々のさ始詳ありす或ハ佛説を以て  
 或ハ唐土落天土もわろく云物ありて其説皆  
 偽之又慈仁天皇仁徳天皇神功皇后任吉大

天の故り  
 天坐り

御神あどより始るといふ説も正しき古代乃  
 記録よんごころあまハ皆偽之をそめめめめ  
 きるよりハ志まざるまらるくちくをよしとす

古代の記録よ三代実録といふ書ありその中  
 には徳如天皇の御代貞觀十二年十二月對馬の  
 国司小地朝臣春風といひ一人起信二事を進  
 言二起信といふ事ありその起信の一事曰軍旅儲  
 畜二起信といふ事あり在カ於イ留ウ々エ留オ雖薄助以保侶カ助王請以調  
 布カ維作保侶衣千領以備不虞云云け文のん  
 ハ軍陣の用意ハたが甲曹を第一とすことと











あしよけつぬのんあざの血をひあぶさるるぞの  
し無き血をぬれいさ血をさざし人をも人  
し思ふたあつあづる血の體のけしうくさる  
つひあやちあつて流るる程は歌中なるの  
家あるは流るあまのりものさるさるあり  
あわろをわけたるぞちやなるありのあへ血  
のたしは流るるをさるあはあうけたる  
ぞしひびい血のあるさるりたしをわろをさ  
れるぞとく血のあわちあありてをりりゆるを  
いわろのむしめくよんまづさるんをさるるさ  
又ち平記新田孫の桑は尾おが末をさるる

流るるのよをむしめりしわろのよ志の事  
る事とあきしありわろのよとわろもさるの  
よしよは同一くさるその方をさるさるさるる  
あきしよ風よわろのさるを吹あひうてさるる  
あしぬをいさありしわろの古きよんをさるる  
もつと古代よわろし何をも色さるるさるけ  
極も遠ひしをさるるぞ

建仁三年九月九日実朝公始く體名しあふとき  
小山丸末の尉朝政を立たぬ尉を元常甲由母所  
等をさるるさる放実を執持して悉くさるる  
なる内末體十はよんたり母衣金板放実あるる



をたるとづー故実といふよむつくハ家なくガ一ツ  
習めもあるづー綱末は

右保呂の神上の方子木竹の類ひをへく支塔よ徳を  
分く由胃の次區の後一徳付くる神ありうぶとの吹  
返のうーろ結をよ環をおく徳をゆひ付くる  
づー△を代はさるーの環をわろ付の環といふハ  
とふ一まほひあるづー又古佐光佐後花園院う忍び  
きー一の管合敷の徳も由胃の志ころのうー子  
わろをけけくる神もあり又志ころのよようけ  
む志ころの下よりけける神もあり何まも  
わろのまをを環あめてゆひくる神ありわろの

△  
の環をわろ付  
の志ころの  
ものあるづー

此のすい木竹をへるごとく一文字あよハあ  
てのぶといふこと一をけけける神よ志このま  
たり古くは徳ハ古代ハ神をうき又ハ古くは徳中を  
徳様よもちあるあり  
大塔まの像古蓋のうーたるをえーよを代  
めわろ串といふやうある物もわろけあひー  
神を志このまありを徳りま志徳とも志れず  
わろの岸を用ひくる神いぶうーき徳之され  
ともわろのまをふ風よ吹あむうされむめき  
たる神よ徳のり

徳のわろの下の方よ完ありわろ付の穴といふ  
しよりともまありわろよ記まごくハ矢茂











きつむびー  
保倍袋ハ巾一ききそお織あまて強ふびー裏ハ  
きびーよそも練よても月由びーよこハ表の地を  
よびふびーお乃よこも若ーうら次大さハ保倍の  
大少よびふびーよ幅五尺ハ寸の保倍をよそを  
る大さ大さ豊三寸余横七寸余縦あるびー袋  
ハその寸よりゆるゆるして豊一尺二寸横は寸よ  
ぬふびーあ方の口を不ころをたびーあ方よ結  
ち付る表二尺三寸ハ何をも月由びーけふらこハ  
平人の料破きびー將軍内帛のよこ圖未詳  
矢母衣のり

矢母衣と云お上古の書よハ尺二寸申古の糸の  
お糸元長の長五日け書は約十の年程云矣  
不ろのよハ知もよそ目志ろくも又ハ折るよこよも  
きびー但ううたれよ糸おの終をぬひもめよそ  
織自びー同糸をちを包て羽の通よ二ツ引あを  
くろく折自びーある糸をろをのけるよこハ矢  
後之云こ去枕先後ろ名がきー一の管名裁の  
終又ハ去枕よまろ漢銘よのき結陳名裁の  
終よまろうのよハ矢をろうけたる袴を名がき  
たりその糸をろハ何をも結よく白く二ツ引  
あをろきまろ又よびり肩をひたる武を名







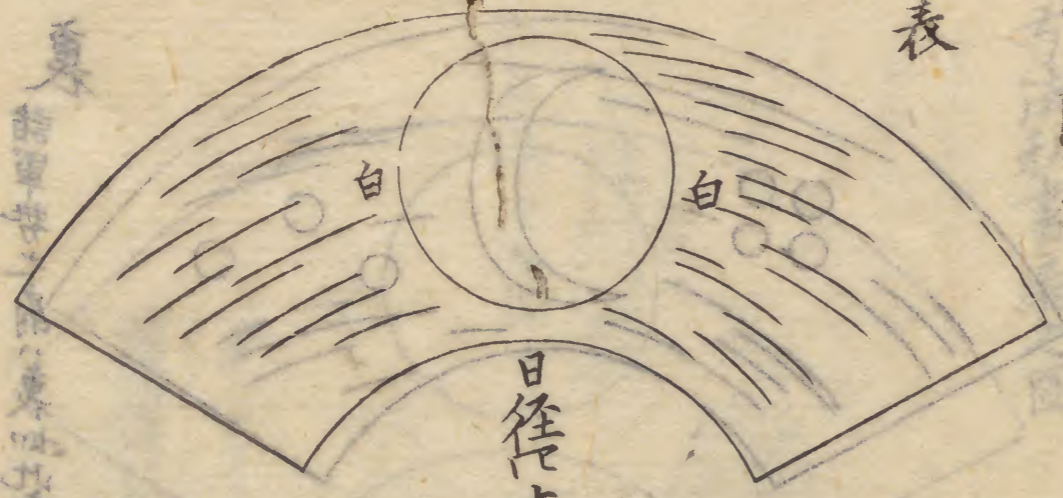
てもよき結心 固まらざるす  
 右の場は撥りて扱きまゝなる忠告を回らうつがせん  
 根中の甲のどくだまりをうつがんとし自をまゐり  
 そねよりまのつらありー之う後者をまどむ  
 ねるがどしーさのよよりて夫だ孫をたをせり  
 てんかゝるもあらまをさーを人もんよまをせま  
 夫を射をーたるをもあらせどうためよむあ  
 の人の放実ましくも御代うつがめごまーつ  
 あーくつらくの草をうけ来るこままより  
 うつがよの何草をのくづきともまーま  
 ありまこころ後のごとくあぶらうつがの古代

こまとし針ありーを夫のまをこくさん  
 よ夫をろをうけーがぬまをまどよぬまてよら  
 ーこゝぬたよ夫をろの代よばをうけをど  
 めーあまべー夫をろの代りやーつらくあま  
 ども右の強のごとくまあまのまもま  
 他あまべー



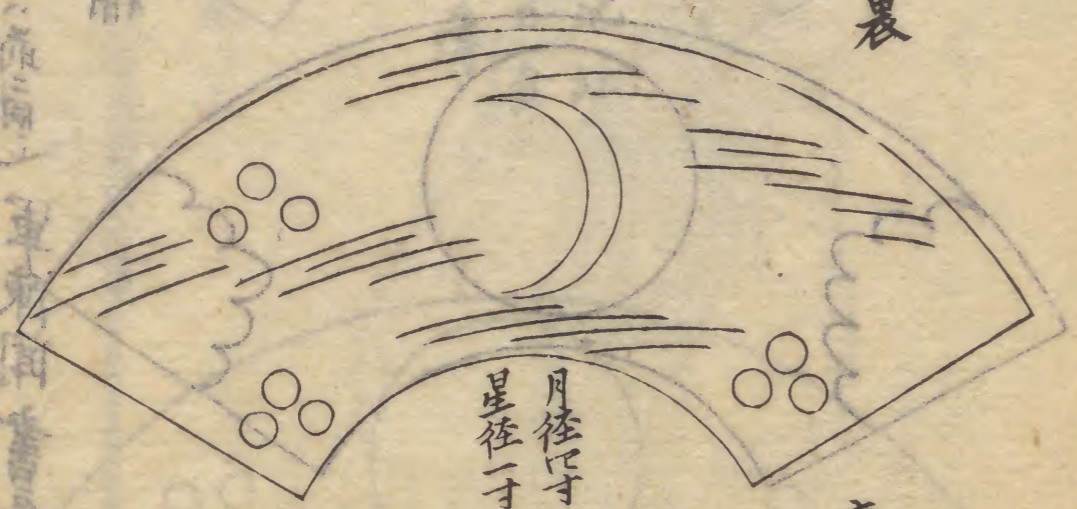
陳霸先之圖

表



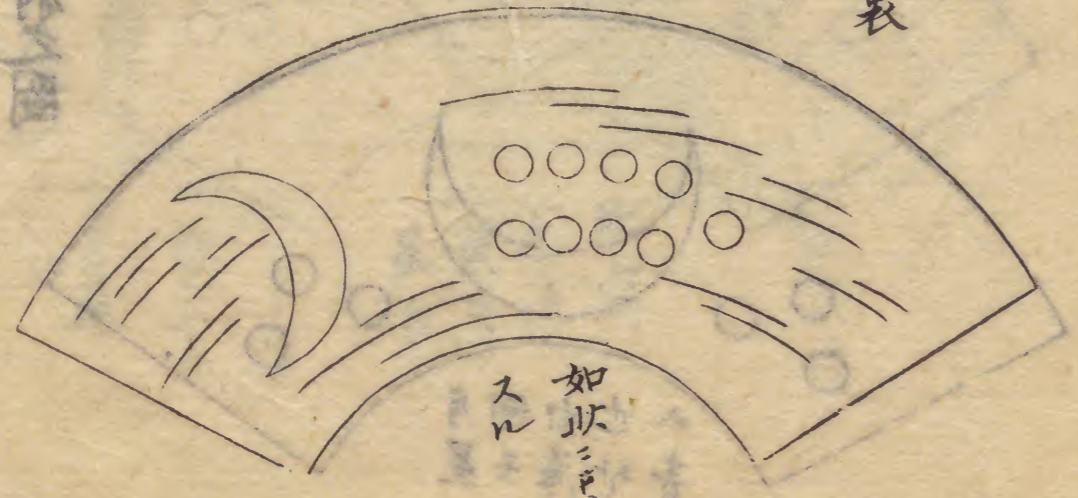
日徑一丈

裏



月徑一丈  
星徑一寸

裏



如此  
又

真  
物  
圖  
畫  
之  
圖

軍

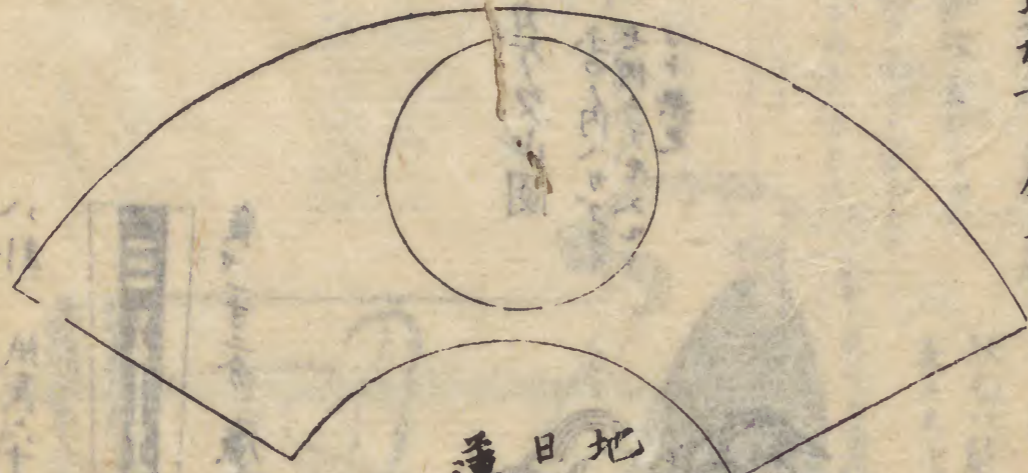
家

五

堂



方法私書扇之圖



薄日地  
金紅

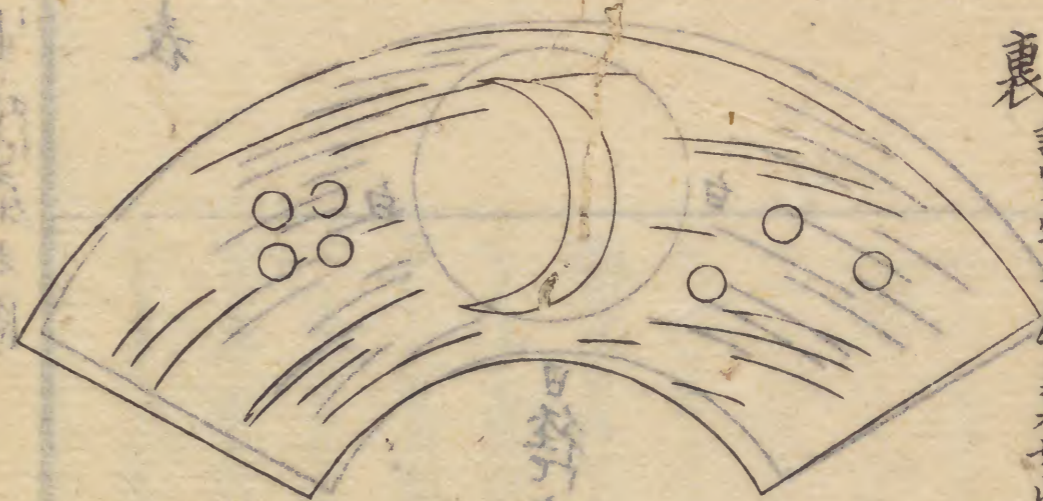


地空  
色淺  
黃月  
星白

裏

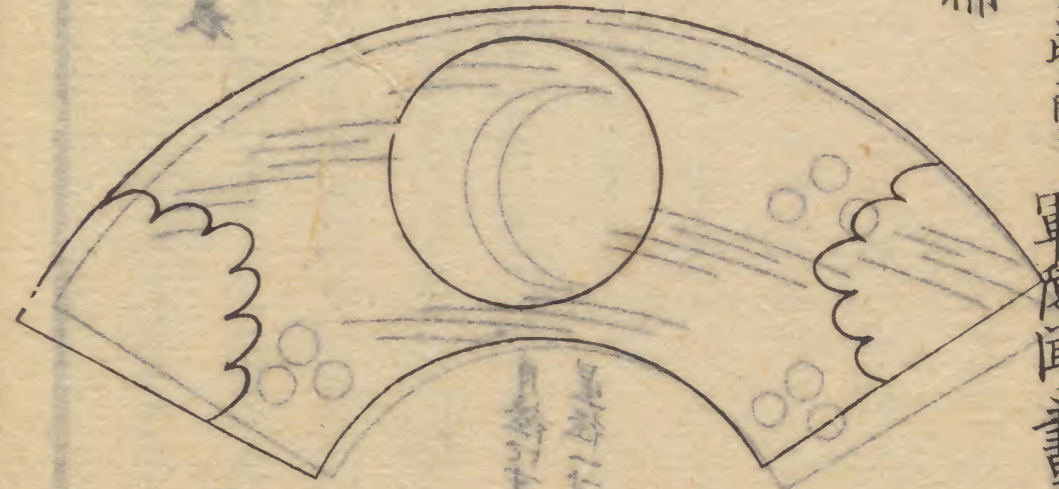
諸軍勢之扇，裏如此表，前二同之

軍陳聞書扇之圖

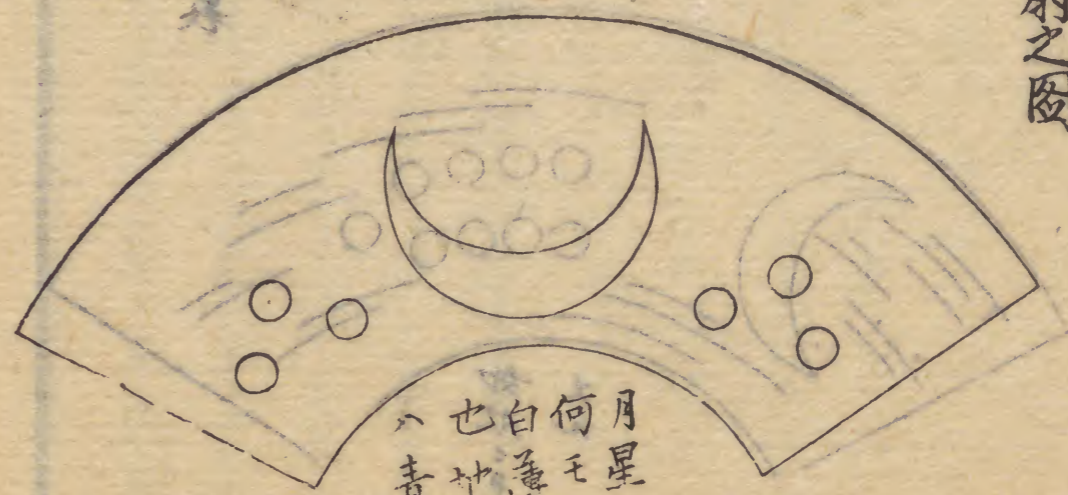


日勢下

補



星勢下



月星  
何王  
白薄  
也地  
青



保呂カケタ止圖

ホロノ内ヘカゴニテ  
モ何ニテモ入ル  
コト無之

古云保呂書



廣ヤ一寸二分 廣六分

八卦 紙長六寸 子ヨマ

緒二尺二寸ヲ折

總一寸五分

東照宮御麾之圖

葵ノ御紋金ヤキツケ

此金物ヲ尾ワヘカブヒル  
シヤリトウナコナリ

金ノ日リン旁銀ノニテ月

此毛ハ鬃牛ト云 鞍ノ尾巴色白シ尾ヅレニ切テ切口ニ金物ヲハメタリ  
長ニ尺七寸アリ毛多ケレトモ甚輕シ俗ニ云唐ノカシラナリ

此緒松五シヤウフ  
ノ深草



黒ヌリ木ハクマ柳軟クマサ筆ノキリキト

フヤ三寸

柄長三尺一寸六分上下ニ銀ノサカハアリケホリ唐草  
以緒紫糸長サニテ口フサ共三四尺五寸ハツ打ナリ



端ヲ一吋二分ホト  
横糸ヲスキトリ  
ハズ、

保呂衣之圖

三幅ナハ長三尺  
四寸八分  
二幅ナハ長二尺  
九寸  
何レモタカ、ハリ  
ノ定トリ

端ノ方ヨコ糸ヲ  
スキハズ、ハカチ

矢保呂之圖

羽ノ通ニ引兩  
付ヘシ終有サレ  
フモ人ノ好ニミル  
ヘシ

母衣ヲカフリテ矢ヲ  
フセリ圖

此知リハカタニテ  
サ、エル

此知母衣ノ中通リ也  
右ノ手ニ矢ヲ一筋モ  
チテ向ヘラシ出ス

軍五

四

保堂藏



母衣ハス、シ又子リ又妙オドノ  
ルイ薄キモノニテ作ル故ス  
キ通リテ行先モ見ユルナリ

鐘ノ保呂付ノ穴ハ緒ヲ通シテワナニ結置テ  
ソコチ保呂ノ緒ヲ通シ結ナリ

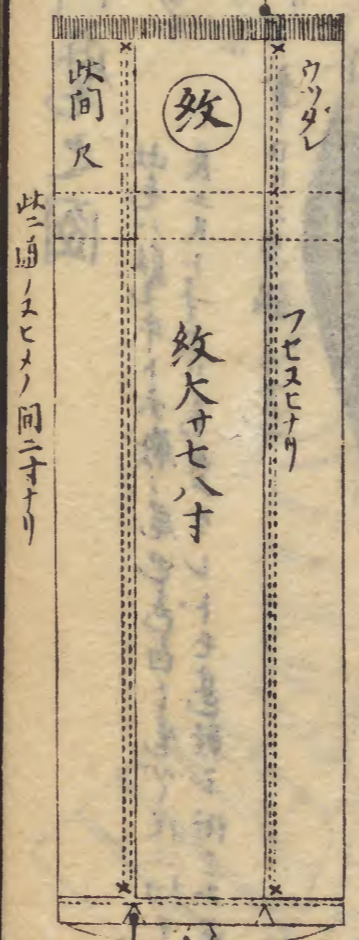
五尺八寸  
五幅

端ヨリ一尺二寸 紋大サ  
ノ内ニ紋ヲ付ル 七八寸

此スハ志ハ地ノ糸ナリ フセヌヒナリ  
色不定將軍家ハ紫

紋

紋大サ七八寸



此二幅ノスヒメノ間ニ寸ナリ

本式ハスバシ  
其次ハ子リ略  
ニハ布也織物  
ハ本式ニアラ  
サレモ大名ナ  
ドハ押テ用ラ  
ル、ナリ

色定ラズ紫ハ幟  
幅ゴトニト、ロハス

保堂藏



補  
矢保呂掛タル鞆負名圖



右ニツノ窓ノ谷合戦之繪ニ  
見エタリ  
土佐先信ノ  
古画ナリ



五ノ二

五

家  
三  
成

五ノ三

五ノ三



此圖古画結城  
合戦之繪ニ見  
タリ



後ノ函鞆  
ノ後ニ十  
ル方ナリ



此方袋無  
矢方ケテ此間ヲ黒草ニテ結ヘシ黒草長ニ尺斗  
ハ五分斗

楯袋ノ両方工  
一尺程ヲ出ル  
此ホコロハ五分寸



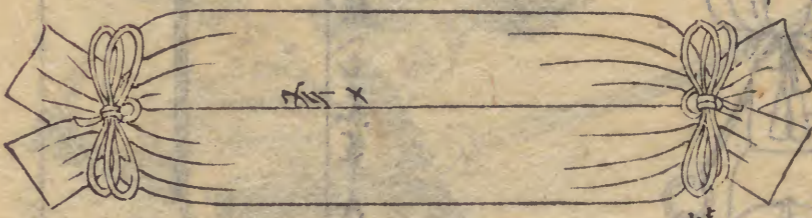
母衣ヲ  
胃ヨリ  
カケタル  
窓

此繪ノホロヲ見テ母衣ニハアラズ  
笠ニレテナリト云人アリ非ナリ

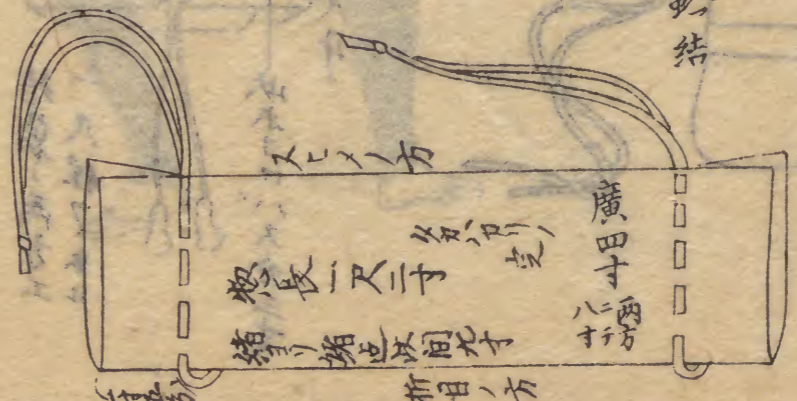


古昼義家朝臣ノ窓ニ見タリ  
此古画ハ権野探幽同永真  
等見粟米田口法眼カ筆

也ト定レ  
魚也



蜻蛉結



大七メ一カ  
廣四寸  
長一尺二寸  
縁ノ端迄以同九寸  
折目ノ方

保呂袋之図

高知縣吉村春峯藏



